

自然と人工の景観美 2段アーチの砂防堰堤

たかお 高尾アーチダム

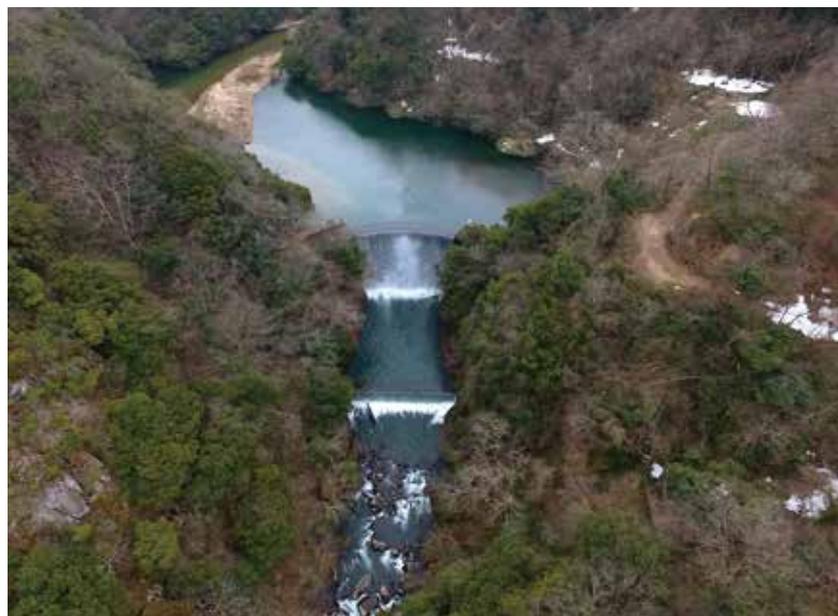


斐伊川の治水は長い間、土砂との闘いであったともいえます。砂鉄を得るために行われた鉄穴流しや洪水による多量の土砂流出によって、斐伊川の河床は年々上昇し、天井川の典型的様相を示していました。このため斐伊川下流の改修を進めるには土砂を止めることが重要との認識から、昭和25（1950）年度から36年度まで砂防工事が斐伊川流域の8カ所で実施されました。本川に斐伊川床固工3基と日登堰堤、支川深野川に深野ダム、阿井川に阿井堰堤、横田川に三成ダム、そして仁多町（現・奥出雲町）を流れる大馬木川に高尾ダムが計画されました。

大馬木川の中流部には、名勝天然記念物「鬼の舌震」があります。黒雲母花崗岩地帯の大馬木川は長い間の河川浸食で深いV字渓谷を形成し、巨岩・奇岩が2kmにわたって連なり、蛇行を繰り返しています。この「鬼の舌震」の下流に高さ27.0m、堤長74.84m、容積8,772m³、計画貯砂量58万m³の変心変半径アーチダム「高尾ダム」が計画されました。

当初、岩盤は良好で、副ダム、水叩は不要と思われていましたが、後に、節理が非常に発達しており、しかもその方向がダムに直角方向であることが判明したため、風化した岩を取り除いた後に本体を築造し、間詰し、その後グラウトを行って岩盤に定着させました。工事は昭和33年10月から始まり、36年10月に完成しました。

『出雲国風土記』によれば、阿井（現・馬木）の里に住む美しい姫を慕って日本海の鰐が毎夜遡って来たが、姫は嫌って大岩で大馬木川をせき止めて姿を隠したけれども、鰐の姫に対する気持ちは変わらず、幾度となく川を遡って来たという話です。この鬼の舌震も高尾堰堤完成後、水位が確保されたため、「一時、観光用の遊覧舟が行きかいたものだが、今は水量が減って昔語りになった」と茶店の店主から子どもの頃の話の話を聞きましたが、今は堆砂が増えたためか昔の話になってしまったようです。



高尾アーチダム 高尾堰堤
H=27.0m L=74.84m V=8,772m³

■位置図



工事中の高尾アーチダム 上流面
掘削後、3mまではプラグコンクリートとして打設し、その後堤体を5ブロックに分けて打設した。



変心変半径アーチダム 高尾堰堤



国の名勝「鬼の舌震」



島根景観賞 舌震の「恋」吊橋（橋長160m幅1.5m）